間瀬幸江
Mase Yukie　宮城学院女子大学教授

第3回

戦争の記憶とカフェの喧騒
作家ジャン・ジロドゥとその時代

1922年に出版されたジャン・ジロドゥ（1882–1944）の小説『ジークフリートとリムーザン人』には，パリのモンパルナス大通りに軒を連ねるカフェの賑わいをユーモラスに描いた一節がある。

> 向かいには競合するカフェがいくつもあるが，通りを渡る者はいなかった。ただし，自分の仲間と仲違いした者，自らの芸術や同志を否定した者，影のために色を変えた者，あるいは政治的理想を変えた者を除いては。

1920年代のパリのカフェは，自由な芸術表現の場であり，人とのつながりを育む場所であり，政治談議が熱を帯びる場でもあった。常連として定位置を楽しむ者もいれば，いくつものカフェをはしごして交流を広げる者もいた。「セレクト」「クロズリ・デ・リラ」「クポール」など，名だたるカフェが立ち並ぶ大通りの路肩は，テラスからあふれたテーブルとイスに埋め尽くされ，客は引きも切らなかった。ジロドゥは「ロトンド」をとりわけ好んだ。ここの常連にはほかに，ピカソ，モディリアーニ，藤田嗣治，ドビュッシーなど著名人の名がずらり並ぶ。

ジャン・ジロドゥは日本では劇作家として知られるが，もとは小説家であり，ドイツ専門の外交官でもある。第一次世界大戦では大量殺戮の最前線で二度にわたり重傷を負う。1916年から1920年頃にかけては，戦場や療養先の病院での実体験をもとにした散文を書いた。戦前から表現活動を始めていた彼は，最前線にあってなお，経験を記録に書き記すことを忘れなかった。

1920年代に入ると，戦争の記憶を長編小説に反映させるようになる。1921年発表の『シュザンヌと太平洋』では，世界旅行に出た船の難破により無人島に漂着したヒロインが，軍服を着た無数の亡骸（なきがら）の漂着に遭遇する。着衣や手のこぶの形などから，彼らの生前を想像するヒロインの語りには，作者自身の心の声が滲む。

時代は流れ，カフェ「セレクト」の常連だったヘミングウェイは1928年にパリを去り，「クポール」に専用席を持っていたゼルダ・フィッツジェラルドは1930年にスイスの精神病院へ入院。そして，ファシズムの時代が足早に迫る。1935年発表の戯曲『トロイ戦争は起こらない』では，トロイの王子エクトールが戦争回避を祈る場面がある。その言葉は，戦場で傷つき命を落としたジロドゥの仲間たちの最期の様子を生々しく想起させる。しかし，ピカソの『ゲルニカ』もまたそうであったように，表現者たちの，戦争への怒りと平和への祈りは，次なる大量虐殺の時代を回避することはできなかった。

戦争の記憶を忘れようとする反動の時代。その喧噪の裏には，忘れたくても忘れられない人々の苦悩があった。賑わうカフェのテラスに座り，ジロドゥは戦争から目を背けるでもなく，忘れるでもなく，人々の悲しみを見つめ，寄り添った。

2024年9月，「フランスのカフェとビストロ，およびその社会的・文化的慣習」がフランスの無形文化遺産に登録された。近年，歴史あるカフェが「スターバックス」などのチェーン店に取って代わられつつある。かつて世界の人々が集い，友情を育んだカフェ文化はもはや，国が守るべき文化アイデンティティである。

チャズ・ラボルド『パリに集う世界の人々』
Chas Laborde, *Les Nations à Paris* (1924)

大修館書店『英語教育』6月号掲載
転載禁止

本文の参考文献は
QR コード参照